

令和7年度 農村 RMO 推進フォーラム（北陸農政局）

パネルディスカッション

日 時：令和7年12月19日（金） 14：00－16：30

場 所：TKP ガーデンシティ PREMIUM 金沢駅西口 2階ホール 2 B

【コーディネーター】

国立大学法人新潟大学 農学部 農学科 教授 坂田 寧代 氏

【パネリスト】

北陸学院大学 社会学部 社会学科 教授 田中 純一 氏

株式会社御祓川 代表取締役 森山 奈美 氏

山古志木籠ふるさと会 直売所郷見庵 管理者 松井 智美 氏

【アドバイザー】

公益社団法人 中越防災安全推進機構 研究員 石塚 直樹 氏

関係各位の尽力により復旧復興は進行しているものの、県外へ流出せざるを得ない人も多い。ふるさと能登を創造していく上で農村 RMO がどのように役割を果たすのか。今回は農地復旧編、交流拠点編という2つの柱で進めていきたい。

1点目「農地復旧編」は、「珠洲市若山町上黒丸集落の経験」をもとに進めていき、2点目「交流拠点編」は、11月下旬にオープンした「輪島市門前町道下地区のとうげマルシェ」について進めていきたい。

<テーマ1：農地復旧編>

(森山氏へ)

能登地震後、集落に入り、農村 RMO 形成の支援を行っていると聞いている。住民との議論を通じて農地復旧の現状、営農体制の将来像、農村 RMO 形成が地域にとって持つ意味を伺いたい。

坂田氏(コーディネーター)

森山氏(株式会社御祓川):

- ・ 石川県内で RMO を事業として導入できそうな地域の事前調査を行うため、今年初めて訪れた。上黒丸も地震後の豪雨もあり大きな被害を受けた地域であり、震災前に約 20 ヘクタール弱あった農地が、3.7 ヘクタールまで縮小する状況となっていた。復旧を進めようにも農地に至る道路がふさがっており、まず水路を直すところから始めなければならず、いつ着手できるのか、どこまで農地が復旧可能なのかという段階から話が始まった。
- ・ 復興を考えると農村の持続可能性を含めたビジョン形成が同時進行で求められる状況であったため、復興計画や復興のビジョンを議論しようとしたが、いきなり集まって話し合う前に、まず各集落の住民への聞き取りから始めた。この際、調査員を集落に入れて個別に話を聞くにあたり、あえて学生に依頼した。
- ・ 経験も土地勘もない新しい視点を持つ学生たちが集落に入り、住民と対話しながら聞き取り調査を行うことで、地域の外から来た若者との交流の場として機能するように設定した。調査計画は我々が立てたが、実際の聞き取りは学生が行えるように調査方法を伝え、学生主体で実施した。その中から小さな声が多く生まれ始めた。
- ・ もう一つ「能登留学」という取組も同時並行で行っており、一か月ほど珠洲に滞在してプロジェクトに参加するもので、少し長期で滞在する学生がいた。昨年の夏に能登留学に行った学生が移住し、上黒丸に頻繁に通うようになり、ほぼ毎日のように住民とラジオ体操をし、炊き出しに参加し、孫のように可

愛がられながら関係性を築いていった。これは業務として依頼したわけではなく、学生が自発的に「面白い」と思い関わり続けた結果であり、集落に可能性を感じた要因の一つである。

- ・ しかし、実際に RMO を組織して進める段階で、この地域には子どもがおらず、最も若い農業者が 40 代から 50 代という現実があった。このまま若い農業者に全負担が集中するのは非常に厳しい状況であり、目指すところがあって資金がつくとはいえ、それだけで進めるのは無責任であると感じた。農地はあるが、誰が耕すのかが明確でなければ復興・復旧を議論することはできないと判断し、まずどのような地域を目指すのかを時間をかけて議論することを提案し、何度かワークショップを実施している。
- ・ まずは RMO に申請をしようというところまでは地域の中で合意が取れ、今年度の申請に向けて何度か話し合いの場を設けてきたが、道のりは容易ではないと認識している。方向性として、今住んでいる住民の余生を送るためだけではなく、今回の RMO 事業が、地域を受け継ぐ未来世代への投資となるように取り組まなければ、やっただけで終わってしまうことになりかねない。その点に注意しつつ、外部の若者と農村をつなぐ作戦で、今も継続している。

(森山氏へ)

将来を描けなければ、移住してもまた帰っていくという形にもなりかねない。持続性をどう担保していくかが非常に重要。公的な資金援助が途絶えた後の持続的な関わりについて教えて頂きたい。

坂田氏(コーディネーター)

森山氏(株式会社御祓川):

- ・ 地域の資源を生かしていかに稼ぐかだと思う。自分たちで稼ぐ力をつけること、自立していくという方向性がない限り、ただお金があるからやりましようというのは本末転倒だと思う。
- ・ 自分たちの地域が持っている資源をもう一度ちゃんと見直す必要がある。能

登の人がやりがちなのは、付加価値を乗せないこと。とても安く、自分が買えるぐらいの値段をつけてしまう。値付けでだいたい失敗する。そうではなく、ちゃんとマーケットを見ながら値付けをし、付加価値をきちんと高めることが重要。持続的にこの地域の資源が守られるためには、未来に向けての投資分も生み出せるぐらいの付加価値を高めることが重要だと思う。

(森山氏へ)

山古志などでも直売所では非常に安く、おいしい野菜がたくさん並んでいるが、「直売所以外に、どのように加工品化や地域資源の打ち出し方を広げていくのか？」この点について教えて頂きたい。

坂田氏(コーディネーター)

森山氏(株式会社御祓川)：

- ・ 誤解のないようにいえば、お客を選べばいいと思っている。地元の人が高く買う必要はないと思う。地元の人たちが直売所で日々の買い物をするのは地域内経済循環であるので、外から稼げばいい。外の人には高く売り、地元の人たちは物々交換でやるというのが農村の生き残る道じゃないかと思っている。
- ・ もう一つは、農村に来ること自体の価値です。先ほど紹介した学生たちはなぜ来ているのかという点。何かを目指すというより、そこにただいるだけということが楽しいらしい。なんかワクワクしている。そこに自分がいることがとても楽しくて、おじいちゃんおばあちゃんが本当の孫じゃないけれども可愛がってくれるという、その関係性にとっても価値を感じてくれているところがミソじゃないかと思っている。彼らが自分たちで生業を作っていたり、自分がこういうことをやってみたいと思えるフィールドとして農村地域が場所を提供できるのであれば、希望が見えてくるのではないかと思っている。

(田中氏へ)

上黒丸以外で、能登で学生ボランティアが移住した事例や、その後の発展をどう進めるかについてどう考えているか。

坂田氏(コーディネーター)

田中氏(北陸学院大学 教授):

1月2日に能登の被災したエリアに入り、それからずっと能登、金沢を往復しながら動いた。やはり圧倒的に人が足りないことを感じていた。北陸学院大学の学生だけでは頭数が足りない状況だった。移動手段と宿泊拠点の確保するため1月の中旬には動き出し、その後、日本ソーシャルワーク教育学校連盟を通じ加盟する大学の学生に呼びかけるとともに全国のキリスト教系の学校にも声をかけた。ほっとけない、何かできることがあるのではないかと、そう考える学生たちが少なからずいた。延べ700人を超える学生たちを能登につないできた。9月に発生した豪雨の後はさらに人手が必要になった。床下の泥出しは特にきつい作業だったが、学生たちは文句も言わず作業してくれた。

- ・ 生活の復興を考える際、住民の方がどこに重心を置いているのかについて、外部の人間は敏感にならなくてはいけないと思った。それを象徴するのが「じゃがいもが待ってくれない」という住民の言葉だった。豪雨の後、大きな石や泥が流れ込み畑は壊滅した。この住民の畑はいわゆる農業として生計を立てている畑ではない。そのため復旧に向けた補助はなく、自分たちではどうすることもできず途方に暮れてるなか「じゃがいもが待ってくれない」とつぶやいた。どういうことか尋ねると、じゃがいもは3月までに作付けしないと美味しいじゃがいもが育たないということ。それを聞いた時、心の中では3月までにじゃがいもを植えるだけの畑を取り戻したいのだということに気づいた。10月から学生たちと畑に入り、流れ込んだ土砂を取り除く過酷な作業を5ヶ月間続けた。奥能登の冬は厳しい。外気温がマイナスになることもあった。そんな中、学生たちは奮闘した。住民たちの姿に「放って

置けない」と思ったのか、気づけば住民も一緒に泥を取り除き始めた。「また畑ができるかもしれない」そんな手応えを感じたのか、12月頃には住民の顔つきが穏やかになり、声に力が入るようになったのを見逃さなかった。仮設住宅から連日通い、畝を作り、イノシシ除けのネットで畑を囲み、作物を植え始めた。畑の世話をするという行為が住民に力を与えている。

- ・ 今年の夏に集落を訪れたとき、「お前らが片付けてくれた畑で採れたんだ。食べてくれ。」そう言ってスイカを差し出してくれた。採れたものは自分たちが食べるだけでなく、東京の息子に送る、近所にお裾分けする、ボランティアに振る舞う。畑は住民と住民、住民とよそ者をつなぐ結節機能を果たしていた。
- ・ それだけではない。畑は住民と土地とをつなぎ、「ここで暮らす」ことを改めて決意させるものともなっている。豪雨被害の後、この集落では半分近くの住民が自宅に戻らない、集落に戻らないと言っていた。しかし畑が元の姿を取り戻していくと、住民さんの中から「戻れるかもしれない」「ここで暮らせるかもしれない」という声が出てきた。「自宅は再建の目途が立っていない。しかし畑を取り戻した。時間はかかるがここで暮らせるかもしれない。」そんな手応えを少しずつつかみ始めたからか、現在は集落のほとんどの住民が「みんなと一緒に暮らす、戻る」と言っている。学生たちの継続した奮闘が住民の背中を押した。

(松井氏へ)

村の皆さんが、心が落ち込んでいた時期に「心を通わせられる場所として畑をつくろう」という経緯があったと思うが、日常的な作業の話と合わせて郷見庵の裏にある畑について伺いたい。

坂田氏(コーディネーター)

松井氏(山古志木籠ふるさと会):

- ・ 山古志自体、震災から3年間、仮設住宅での暮らしになった。最初にお年寄り、母もそうだったが、「仮設住宅で何やりたい？」と聞くと「畑がやりたい、土をいじりたい」と言い、仮設住宅の近くに畑の場所を作ってもらった。仮設住宅から一輪車を押して畑に行き、よその地区の人ともそこで顔を合わせて、それがとても生きがいになっていた。農村の人は土や自然をすごく大事にしている。
- ・ 自然の中に答えがある、自然が答えを導き出してくれる。さきほどの牛売りもそうだし、錦鯉もそうだが、自然があって、その土壌があって、人がいて、生き物がいて、それがうまく調和されて素晴らしい産物が生まれたり、宝物を受け取れる。昔の人は農業は本当に大変だったと思うが、その苦労も乗り越えられるような宝を受けられる。それがあれば頑張れる。そこで培われるたくましさとか、いいものが力になっている。その調和がこの村の人、山の人にはあるのではないかと思う。自然の中の循環を見ても、山から川に流れ、海にミネラルの栄養がいき、海の家産物が魚や海藻を作り出す。そしてまたそれが雨になって山に戻る。そんな循環が、人の暮らしの中でも利他的で、私利私欲じゃなく、みんなのために、誰かのためにという働きにつながっている。そういう循環が大事なんじゃないかと思う。

(石塚氏へ)

中間支援組織として上黒丸と山古志との仲介をセッティングしてきたことについて補足や、視察後の振り返り、どのような意見が上黒丸の方から出たのかについて伺いたい。

坂田氏(コーディネーター)

石塚氏(公益社団法人中越防災安全推進機構):

- ・ きっかけは、中越側の背景として、2年ほど前から「復興プロセス研究会」という研究会をやっている。研究会の中で整理するだけでなく、この結果をもとに能登など復興に取り組んでいる方々と関係性をつくりたいという話があり、そのための事業予算を積んでいた。
- ・ もう一つは、「中越メモリアル回廊」という震災伝承施設があり、これが来年3月でリニューアルされ、だいぶ規模が縮小される。これは財源の切れ目でもあるが、そういったことを受け、施設に頼らない被災地間交流やコミュニケーションをどうつくるかを模索する時期でもあった。
- ・ そうした背景の中で、一本のメールを頂いた。今日も会場にいらっしゃる金沢大の信岡先生からで、中越の本を読んだと。今、先生が関わっている上黒丸というところに、ぜひ中越とのつなぎをしたい、という連絡だった。それで今日来て頂いている上黒丸におつなぎいただいた、というのがきっかけだった。その後、何度も中越に来て頂き、打ち合わせや現場を見たりすることを重ねながら視察の企画が作られていった、という状況。

交流後、上黒丸の方からどのような意見が出たか。

坂田氏(コーディネーター)

石塚氏(公益社団法人中越防災安全推進機構):

- ・ 振り返りはまだしておらず、これから話を聞ければいいと思っている。今の段階では、初めは「同じだね」と。視察に到着して、最初に現場や施設を見る中では、「これはあそこと同じ」という話がよく出てくる。しかし帰る頃になると、「やっぱり違ったよね」という話になることもある。それはどうということかと考えてみると、山古志を見てもらうことで、上黒丸、自分たちのところの解像度が上がる、少し比較しながら「自分たちのところの特徴はこうだ」とつかんでもらえるきっかけになったのではないかと、そんな声が聞

こえていた。

(松井氏へ)

被災地間交流をどの様な思いで進めてきたか、そのモチベーションや親の背中を見て次の世代が頑張るという事についてどう感じているか。

坂田氏(コーディネーター)

松井氏(山古志木籠ふるさと会):

- ・ 被災地間交流については、田中先生の指摘にもあったように、根底には純粋に誰かを助けたいという思いがある。しかし、どのように交流を築くか、距離感をどう保つかには難しさもあった。そうした中で、機構や伴走者が間に入り、良好な関係を築く基盤が整えられたと感じている。
- ・ 神戸との交流では、伝承をどう続けるか悩み、頼る思いで神戸を訪れた記憶が残っている。温かく迎えられ、支えられた経験は大きかった。去年は阪神・淡路が30年、中越が20年。さらに東日本とのつながりが生まれたことで、自らの力にもなり、訪れる側にとっても行き来を重ねる関係が愛着を生み、サードスペースのような感覚を育んでいると感じている。
- ・ 人との関係が、自分にとっての原動力になっている。明日は輪島を訪れる予定だが、そこで皆と時間を共有し、笑顔をつくりたいという思いでまた明日頑張れると感じている。

(森山氏・田中氏へ)

上黒丸の農地復旧編に関連して思う事。

坂田氏(コーディネーター)

森山氏(株式会社御祓川):

- ・ 地域に今まで関係なかった人たちがこの地域に入り、初めて人と出会い、こ

ここで関係が生まれ、またそこに帰ってくるという循環は、中越の方からも、東日本の復興に携わっていた人たちからも聞いた言葉である。復興が何を指し、何をもって復興とするのかという問いに対し、災害は悲しい出来事であつらいものだが、この災害があつたからこそ今があると思えるようになった時が復興であるという一つの定義を教えられた。

- ・ それがなければ出会えなかった人たちと出会い、共に未来を描き、共に田畑を耕している状況そのものが価値を持つ。先ほど売上を上げろという話をしたが、それ以上の価値がそこにある。その価値を、農村と若者がつながっていることの意味として、私たちが未来に向けて「こういうことが生まれた」と言える必要がある。むしろそこに面白さを感じる若者が今、能登に来てると感じている。
- ・ 彼らは「東京はつまらない」と言う。その理由を尋ねると、自分の行ったことが地域に直接影響する感覚が、大きな都市では得られないという。自分がかいた泥の一かきが地域のためになる、自分が耕した畑が地域を良くする一歩につながるという実感が大きいのだと感じている。
- ・ 先ほど石塚氏の調査で、復興感と復興に関わった人との相関が示されていた。今の話と重ねても、自分が地域に関わられたという感覚が、もし対外的にも評価し得る数値として可視化できるのであれば、売上や人口といった既存の指標とは異なるY軸を設定できるのではないかと考えている。その場合、その指標は何によって測ればよいのか。

石塚氏(公益社団法人中越防災安全推進機構)：

- ・ 中越の復興では「復興デザイン策定」という基金メニューがあり、郷見庵もその制度を活用して建物の改修を行った事業があつた。その際、足し算と掛け算の話に触れたが、事業を掛け算の段階へ進められるだけの熟度が地域にあるのかどうかを、どのように測るかについて議論した時期があつた。
- ・ その際に指標を作成し、例えば「やれるという自信を持っているか」など、6項目ほどの指標を設定し、それを用いて事業へのアドバイスをを行った経緯がある。

森山氏(株式会社御祓川):

- ・ 農村を農政の指標で測ろうとすると、農地のヘクタール数や売上額などに寄ってしまう。しかし、先ほどの田中氏の話聞きながら、確実に健康になっていると直感した。地元のおじいちゃんおばあちゃん達が、もし農地が戻らなければ外に出なくなり、そのまま要介護になっていた可能性がある。しかし、農地に行き、やることがあることで、自分たちの足で立つ力になっている。これが健康寿命を延ばし、医療費を削減し、本来であればかかっていたかもしれない税負担を抑えているのではないかと感じているがどうか。田中先生に伺いたい。

田中氏(北陸学院大学 教授):

- ・ 今、能登では公費解体が完了に近いところまで来ている。この後は住宅再建、あるいは再建が難しい世帯は災害公営住宅に移り住む段階へと移っていく。住宅の再建は生活復興の重要な要素の一つであることは間違いない。だが、家が建ったからといって生活が復興するわけではない。それは能登で生活を営む住民とともに時間を過ごす中で強く実感する。日常の暮らしの文脈の中に編み込まれている畑との関わり、海との関わり、山との関わり、先祖との関わりをどう取り戻すか。そうした関係をたて糸。よこ糸にこれからの暮らしの再生を編み直していくか。その先に復興の実感があるのではないかと思う。
- ・ 都市部で暮らす我々の場合、海と関わるといえば、年に数回海水浴やドライブといった程度である。しかし半農半漁の集落では、日常的に海、山、畑と関わりながら暮らしている。先祖についてもそうだ。地震の直後、最初に言われたのは「仏壇を動かしてくれ」「墓石をなんとかしてあげてくれ」だった。豪雨の後も、「家の中の泥かきより、墓の泥を取り除いてくれ」だった。復旧作業ではそこで暮らす住民の生活の重心がどこにあるのかを捉える必要がある。住民にとっての生活復興とは、海との関わりをどう取り戻すか、山との関わりをどう取り戻すか、畑との関わりをどう取り戻すか、先祖との関わりをどう取り戻すか、都市部で生活する我々にはない視点や価値観を見

落としてはならないことに気付かされるのである。

- ・ 地震や豪雨は住民に大きな打撃をもたらした。一方で復旧過程で多くの若者やよそ者との出会いをもたらしもした。先ほど山古志村で「1000 人減ったなら 1000 人増やせばいい」という話があったが、過疎と高齢化が著しい能登にあっても、そのような発想が大切になるのかもしれない。10 月に学生らと海岸清掃に参加した。海岸に面する集落では震災前から毎年やっていることであるが、自宅の復旧で手がいっぱいなことに加え、地震と豪雨の影響で例年に増す量の漂着ごみが海岸を覆い尽くす様に、住民は困り果てていた。そこに 100 人の学生が来た。平均年齢 60 歳を超える集落が、その日だけ 30 代になった。汗を流し漂着ごみを運ぶ大学生のを見て、「足が痛い」「腰が痛い」と言っていたはずの住民が海岸に降り立ち、学生の間に入り一緒に流木を運び始めた。学生にとっては、1 日限定ではあるが半住民として過ごした貴重な時間であり、住民にとっては「ここで暮らす」ことの意味を再確認する時間になったのではないだろうか。震災後に生まれた新たな関係性が、住民の生活復興をささえる重要な要素になるのではないか。

(松井氏へ)

外から多くの人を訪れることに、時には戸惑いや疑問が生じる場面もあると思う。中越地震の際には受け入れる側の集落として、どのような状況があったのか。

坂田氏(コーディネーター)

松井氏(山古志木籠ふるさと会):

- ・ 住民の中には意固地なおじいちゃんおばあちゃんもいて、関わりたくないという人もいる。しかし、発災からの年月の中で、少しでも山古志に来て、何でもいいから感じてほしいという思いがある。山だ、こんなうねうねした場所をどうやって直してきたのか、少しでも関心を持ってもらいたいという気持ちは、被災地からすると大事な部分だと思う。

- ・ ふるさと会という大きな力を持つ人たちが集まってイベントを行う中でも、人である以上、いざこざはある。しかし、それも今になってみれば思い出であり、外部の人たちがけんかしながらわちゃわちゃやっているのを、住民は「私たちは大人になろうね」という目線で見ている。そうした関係が、結果として良い関係性につながっているのだと感じる。
- ・ 集落の人たちは本当に温かく、人を集める力、人間力がある。何でも温かく迎えてくれる。こんなに遠くから来てくれる人がいるということ自体が嬉しく、外部からの来訪者が多いほど、どんな形でも賑わいが生まれる。けんかしていようが何であろうが、そこに人としての世界観が生まれることが、成長の段階で必要なのだと思う。

<テーマ2：交流拠点編>

(田中氏へ)

11月下旬にオープンした「とうげマルシェ」について。

2007年の能登半島地震の時から道下地区に関わっている田中氏に経緯を伺いたい。

坂田氏(コーディネーター)

田中氏(北陸学院大学 教授)：

2007年に発生した能登半島地震で住宅被害の棟数が最も多かったのが、輪島市門前町道下地区だった。当時は短い期間のうちに住宅再建を果たした世帯が多かった。これは住宅再建制度や地震保険加入者が多かったことなどもあるが、住民の多くが今より年齢が若く、住宅再建意欲が強かったことが大きかった。しかし今回は、あれから18歳年を重ねたことに加え、前回以上の被害ということもあり、住宅再建やまちの復興は思うように進んでいない。そんな中、11月「とうげマルシェ」がオープンした。2007年当時、集落には3つのスーパー・小売店が存在していたが、地震直後にゼロになり、この間買い物拠点のない集落となっていた。今回の地震の後。被災した女性たちが「ここで暮らしたい」「私ら女性が頑張って街を取り戻したい」と言い出し、人が集まり、つながるマルシェ作りの構想が動き出した。区長さんによれば、集落のまちづくりで女性が主体となって動き出した例は過去に前例がない、とのこと。そんな女性たちの背中を押したのが、松井氏や山古志村のお母ちゃんたちだった。山古志村を直接訪ね、見て、聴いて、感じ取った。「とうげマルシェ」のイメージが訪れた門前の女性たちの間に共有化、具体化していった。資金をクラウドファンディングで募った。2000万円は難しいと思われたが、「ここで暮らす」「復興させる」という思いは全国に届き、ついに「食」の交流拠点が誕生した。「とうげマルシェ」は、住民の誰もが「大和さん」と呼び慕う大和医院の隣に建てられた。地域に欠かせない「医療」の隣に「買い物」の拠点が誕生したことの意義は大きい。ここが核となり生活機能が広がり、住民同士の交流が広がれば、集落の復興は勢いづくに違いない。

農村 RMO を形成していく上で大事な事は何か。

坂田氏(コーディネーター)

石塚氏(公益社団法人中越防災安全推進機構):

- ・ 本日中越の復興の概要を話し、つながりづくりの観点から述べたが、場づくりを行う際に気をつけていたのは、今回の上黒丸の方々に中越へ来てもらった時で言えば、押し付けないということだった。「生の声を聞きたい」という要望があったため、こちらから「こうだったから、こうあるべきだ」と伝えることは一切せず、むしろ楽しい時間を共有し、骨休めの機会、振り返りのできる場になればよいと考えていた。
- ・ 課題を考えるというより、課題のレンズを外すようなことができれば、人と人との関係が生まれ、そこから色んなつながりが広がるのではないかと考えて企画した部分もある。そうした観点で言えば、今日述べたような過ごす関わり、色々な人との認め合いの関係性がつくれればよいと思っている。
- ・ 中越では復興交流会議という企画を行っていたが、農村 RMO でも、各 RMO の交流会議、あるいは交流会のような、学び合い、認め合う機会があれば、それぞれの RMO の成長や発展にもつながるのではないかと考えている。

松井氏(山古志木籠ふるさと会):

- ・ 私が上黒丸から交流を終えて帰ってきて、家で休んでいる時に、ふと宮沢賢治の詩が降りてきた。雨にも負けず、風にも負けず、地震にも負けず、少しの米と野菜と味噌と丈夫な体をつくり、自分の勘定は入れず、そこで静かに笑っている。病気の人がいたら助けよう、母ちゃんがつらかったら稲束を背負って助けよう、けんかしている人がいたら仲裁しよう。まさにこの人たちじゃないかと思った。
- ・ 何十年も前から歌い継がれてきたものが、今の時代にも染み渡り、その生き方を体現している人たちがここにリアルに存在している。これは守られな

ればならない。農村であり、里山であり、日本の田んぼや田舎であり、そこを守っていく必要がある。これが本来の社会のあり方であり、世界を変えるような生き方につながると感じた。「そんなあなたに私もなりたい」というメッセージとともに、その物語を、「雨にも負けず、風にも負けず、地震にも負けず」という本を坂田先生に書いてもらい、それが百年先まで読み継がれる本になることが今の私の夢である。夢が未来を描くという話が先ほどあったが、まさにそれが重要なのだと思う。

森山氏(株式会社御祓川):

- ・ RMO は組織。0 が組織を意味する。だからこそ、組織のあり方そのものについて、今日とても示唆深く感じたのは、目指すことと過ごすことのバランスが重要だという点だった。どうしても組織をつくると、目指す方向に傾きがちになる。
- ・ しかし、その組織をつくる根っこにあるのは、農村で過ごす私たちのつながりの豊かさである。地域の中の豊かさも、地域の外とのつながりも含めて、私たちの豊かさを守るための目指すことなんだということ。この目指すことと過ごすことのバランスを取りながら運営できる組織を、上黒丸でも是非作っていきたい。

田中氏(北陸学院大学 教授):

- ・ 「大きな復興」ではなく「小さな復興」が重要であると考えている。国や県が作る計画が「大きな復興」だとすれば、ここで暮らし、これからも暮らし続ける覚悟や夢、決意を持った生活者の声から紡がれるのが「小さな復興」である。住民がどのような集落で暮らしたいのか、どのように土地と関わりたいのか、こうした思いを丁寧に聞いていく必要がある。ここで言う「思い」は必ずしも言語化されているとは限らない。ノンバーバルなものも暮らしのあちらこちらに散らばっている。豪雨で被害を受けた畑に入り黙々と耕している女性がいる。隆起した海岸に降り立ち、岩のりを摘み取り、天日干する男性がいる。黙々と作業をするその姿が、すでに「私はここで暮らす」「俺

の故郷はここだ」と強烈なまでに発している。住民の声、声なき声をしっかりと現場で捉えることが重要である。

- ・ 住民の生活史に着目することも大切だ。これまでどのような暮らしを営んできたのかを、海、畑、山、先祖との関係性、関わりの重層性の文脈から捉えていく。そうすることで「ここで暮らしたい」「これからも暮らしたい」住民の思いが見えてくる。同時に住民は新たな生活史を刻み始めようとしている。4メートル近く隆起した自宅前の海岸を目の前にしながら「こうなったものは仕方がない。この中でやっていだけや」と語っていた。変わり果てた集落や海岸を見つめながら、今までのようにこれからもここで暮らす覚悟を決めている。とはいえ、経験したこともない現実に戸惑っていることもまた事実だろう。住民が自らの力で新たな生活史を編み込むんでいくためには、過去に自然災害を経験した地域住民や、能登に関心を持つボランティアなどの関係人口の存在と眼差しが大切である。

坂田氏（総括）

このディスカッションを通じて、それぞれの地区でできることからまずはやってみることが非常に大事なのではないかと思う。「能登はやさしや土までも」という言葉は石川県にいた時に非常によく耳にしていた言葉。そういう能登の方々の優しい人情、美しい自然、風土、そういうものが引き続き継承されていくように、私たちにできることがあれば、北陸農政局の方々も含め、声をかけていただきたい。